

おしゃぶりユウガと 尻使いマリナの  
ガラルん天下ば取ったるばい!!

始まるよ♪





「なあ知ってるか？  
バトルに負けてあげると  
しゃぶってくれる  
トレーナーがいるらしいぞ」



「マジムスか!?!」





フェラで勝利を買うトレーナー、  
通称おしゃぶりユウリ。

ジムチャレンジとして実績を  
積むため今日も新たなチンコをしゃぶる。



「なあ知ってるか？  
バトルに負けてあげると  
アナルでさせてくれる  
トレーナーもいるらしいぞ」



「アナル!？」



「バトルに勝たせて  
くれたらあたしんお尻  
好きにしてよかよ♪」

リーグ制覇の野望のため  
今日もお尻を突き出す。

アナルで勝利を  
買うトレーナー、  
通称：尻使いマリイ。



「お尻好きにして良かった」って  
言っとーとたまに変わった  
トレーナーが来ることが…。

「ホントにうんち  
するだけで勝ち  
譲ってくれると?」

「もちろん、  
さあ早く早く」

「臭うても  
知らんけんね!」







「待ちんしゃい」

おしり





「ギクッ…」

「あんなね、  
体使うて勝ち  
稼いどー娘つて」







「誰？」

「勘違いしないで、別に責める気はなから、ちよつと話があっただけ」







「<…」

「ねえ、  
あんたあたしと  
手組まん？」





「正直お尻だけじゃ  
限界感じとった」

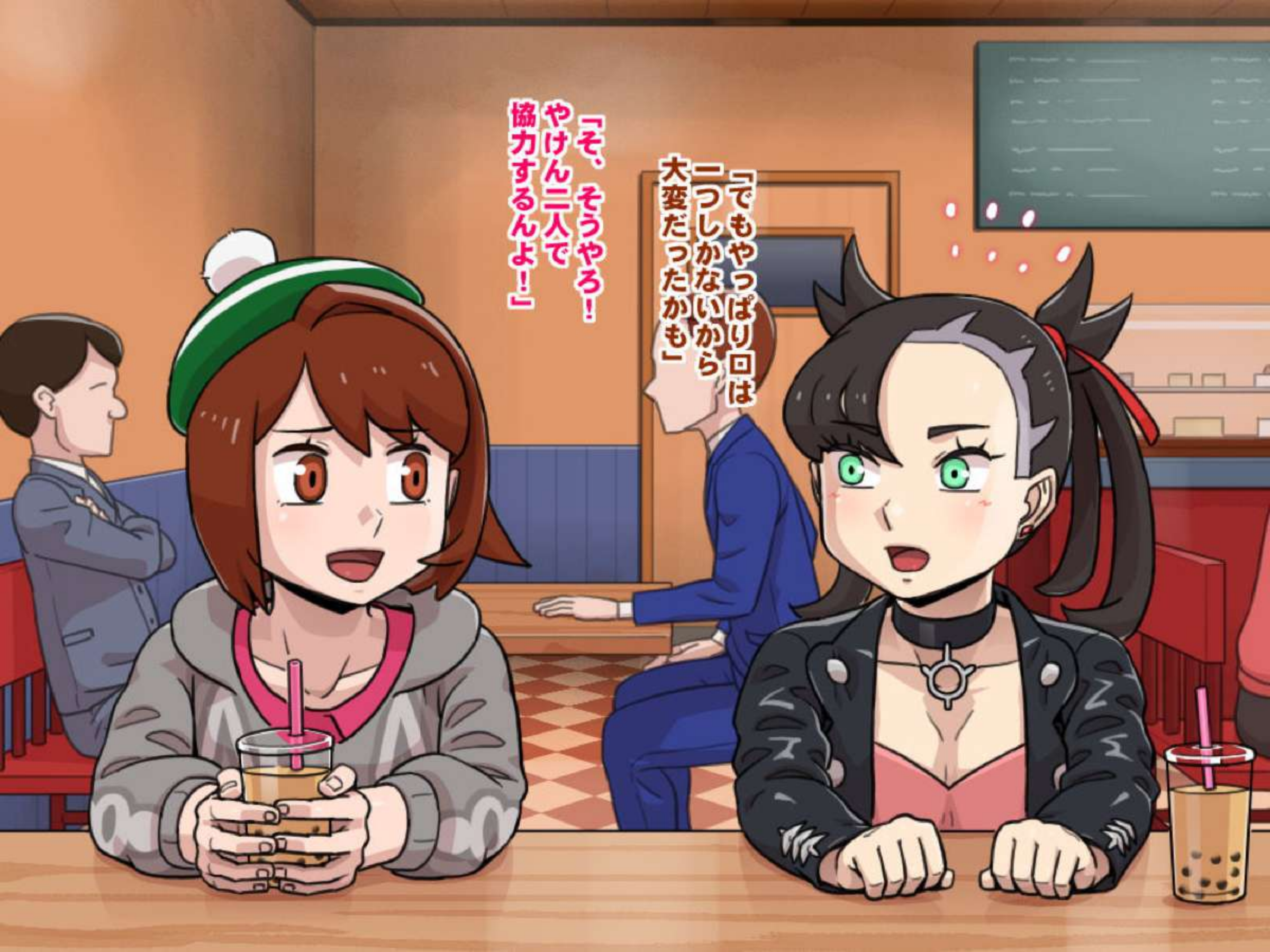
「だってダブルバトルるとき  
一人待たせてしまうやる」

「うーん、私は両手で  
しちゃってたかな」

「あんた妻か……」





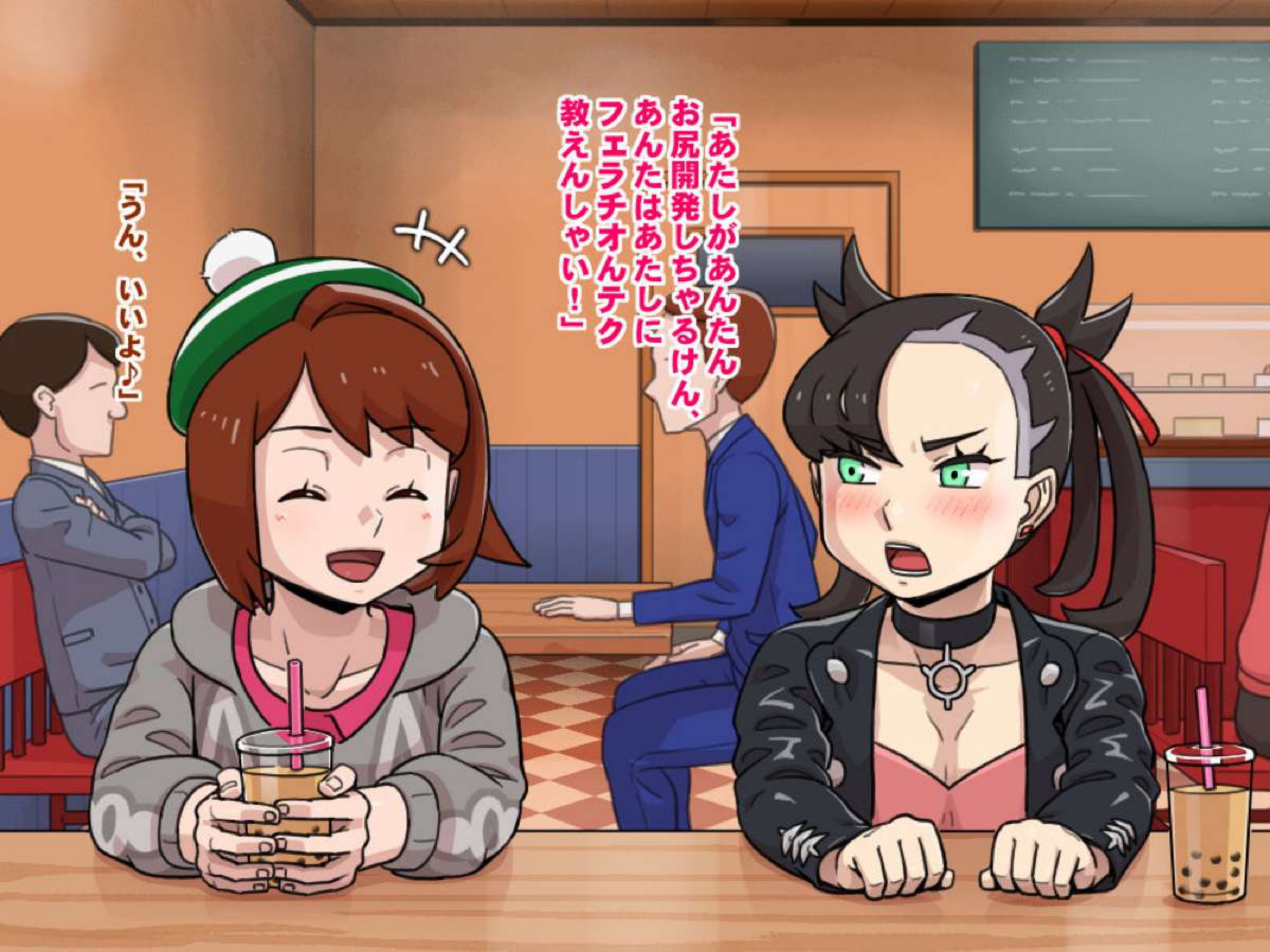


「そ、そうやる！  
やけん二人で  
協力するんよ！」

「でもやっぱり回は  
一つしかないから  
大変だったかも」







「うん、いろいろ」

「あたしがあんなん  
お尻開発しちやるけん、  
あんたはあたしに  
フエラチオンテク  
教えんしゃい！」

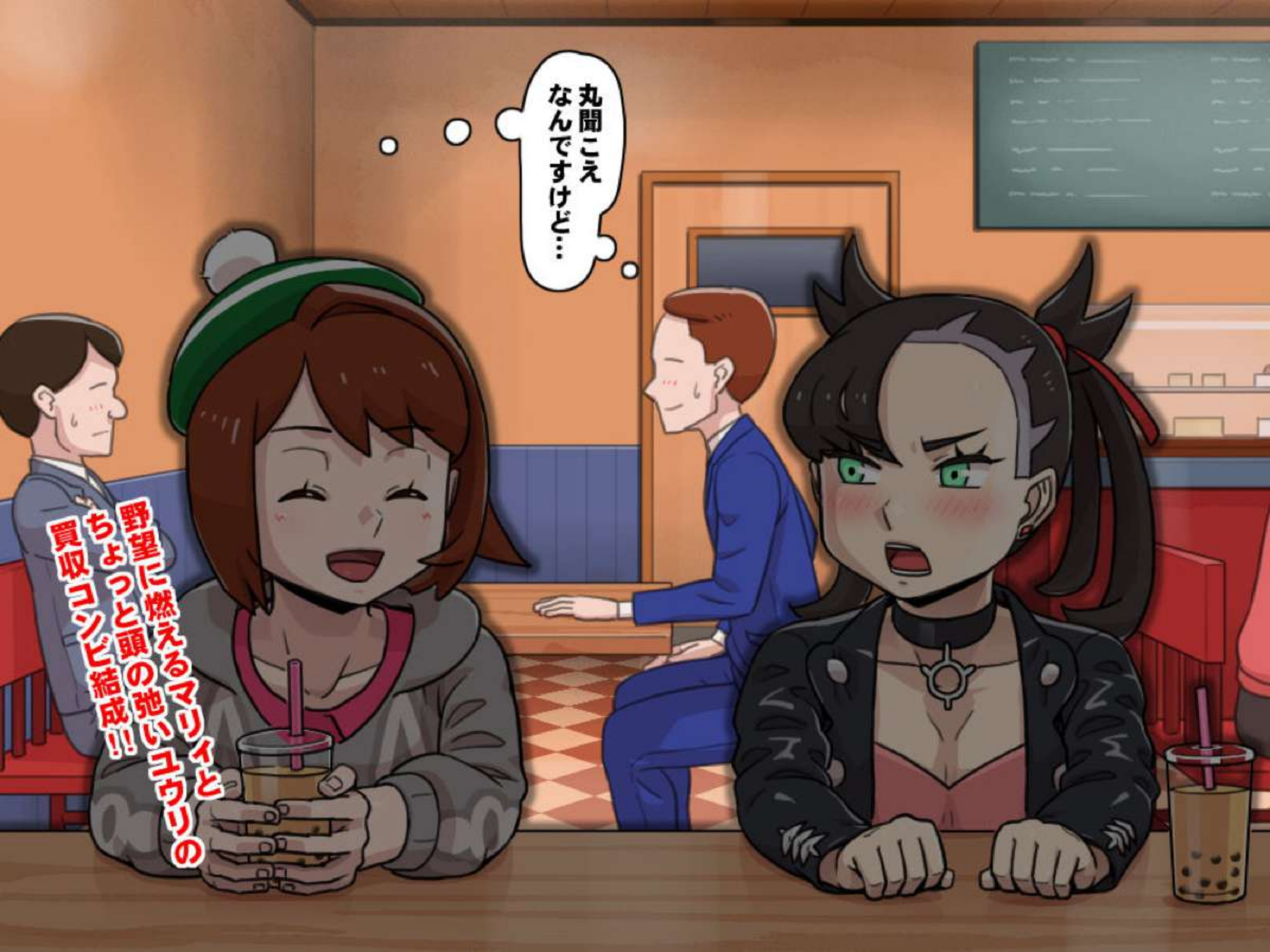
✕✕





丸聞こえ  
なんですけど…

野望に燃えるマリイとの  
ちよつと頭の弛いユウリの  
買収コンビ結成!!





「分かるユウリ？  
もう全部入っとるんよ」

「何か…変な感じ…っ」

「ふふ、アタシも同じ  
やったからユウリも  
才能あるってことやねっ」

「才能？」

「ぞ、お尻で感じる才能」





「あっあっ、ああ……!!  
マ、マリイ……!!」

「ソクソクが止まらんでしょ？  
そのまま身を任せていいんよ」







「んっ、あああ……!!」





「ちょっと…好きかも♥」

「どうやったユウリ？  
初めてのお尻の感想は？」

「アタシん目に狂いは  
なかったってことやね♪」



「ほらほらく、ユウリン  
うんち見せんしやい♪」

「ひ、広げちゃ  
駄目だってば〜!」





「だめマリイ…  
ホントに出ちゃいそう…」

「アタシは本気よユウリ」

「…」

「我慢は良くなか、  
アタシん手で受け止め  
たげるから出しんじやい」





「ホ、ホントに  
入るのかな？」

「うん、大分ほぐれたし  
これならいけそうやね」

「ちゃんと調べたけん  
大丈夫、いくよ……」







「んうう……!」

「ギョ……」

「アッアッアッ……」

「指五本入ったよユウリ、  
後は一番太いところだけ……」













「あーっ！」

「アッアッアッ  
射精するのよ」

+



「はは…  
これあたしん  
チンポやないのに  
興奮するね！」

「私も教えるの  
初めてだから  
ドキドキしちゃったよ」





「わあ！凄いつ。マリイ  
おちんちん生えてる！」

「しえ、しえからしかつ。  
あんまジロジロ見んでよ」

「ううん見ちやうよ！  
だって凄く大きいもん！」





「ねえ、  
舐めてもらって」

「……………」  
「好きにすればよか」



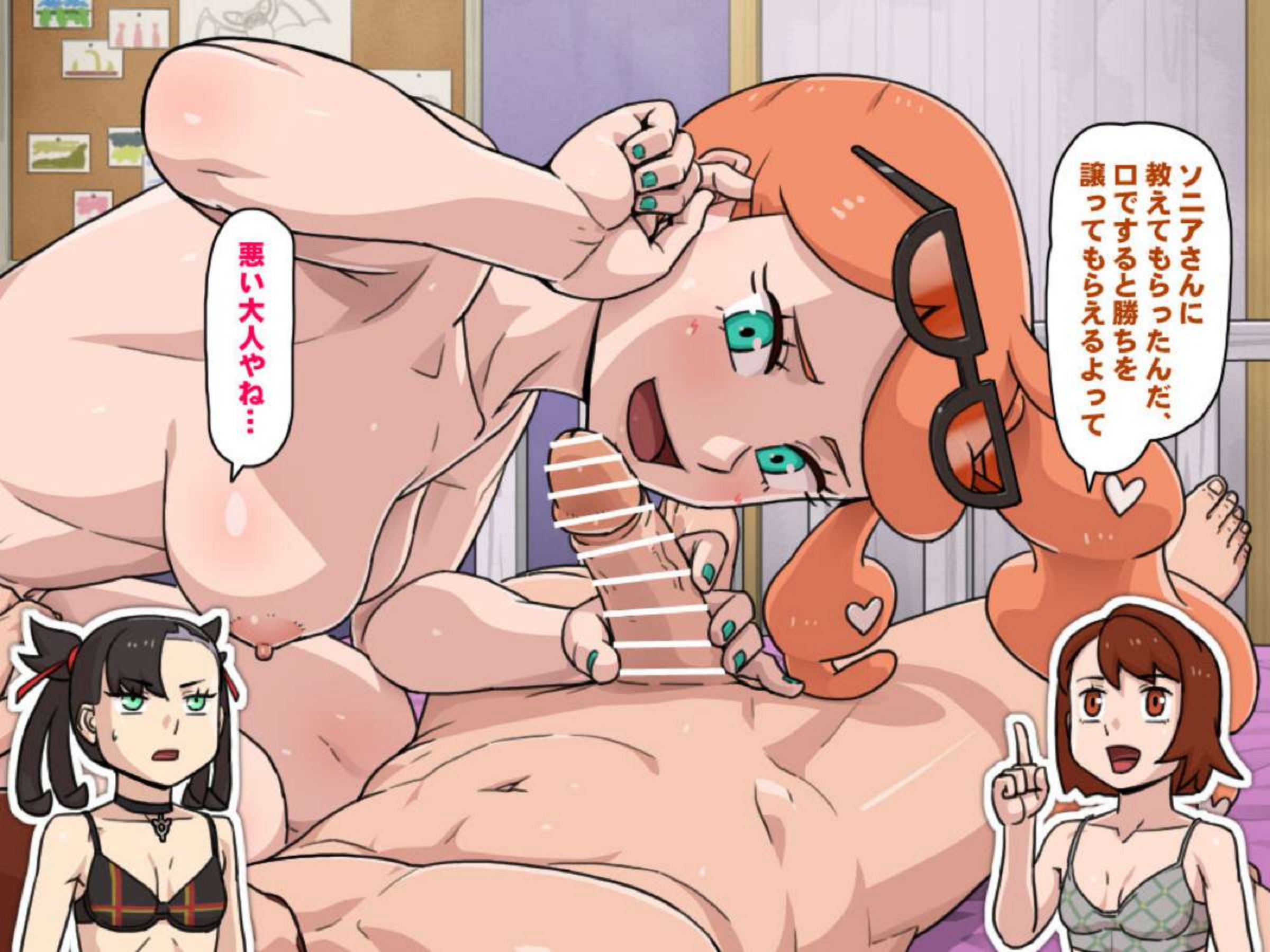


「そういえば何でマリイは  
お尻でしようと思ったの？  
変態さん？」

「へ、変態つて言わんでよー  
ならユウリは何でよー」







悪い大人やね…

ソニアさんに  
教えてもらったんだ、  
口ですると勝ちを  
譲ってもらえるよって

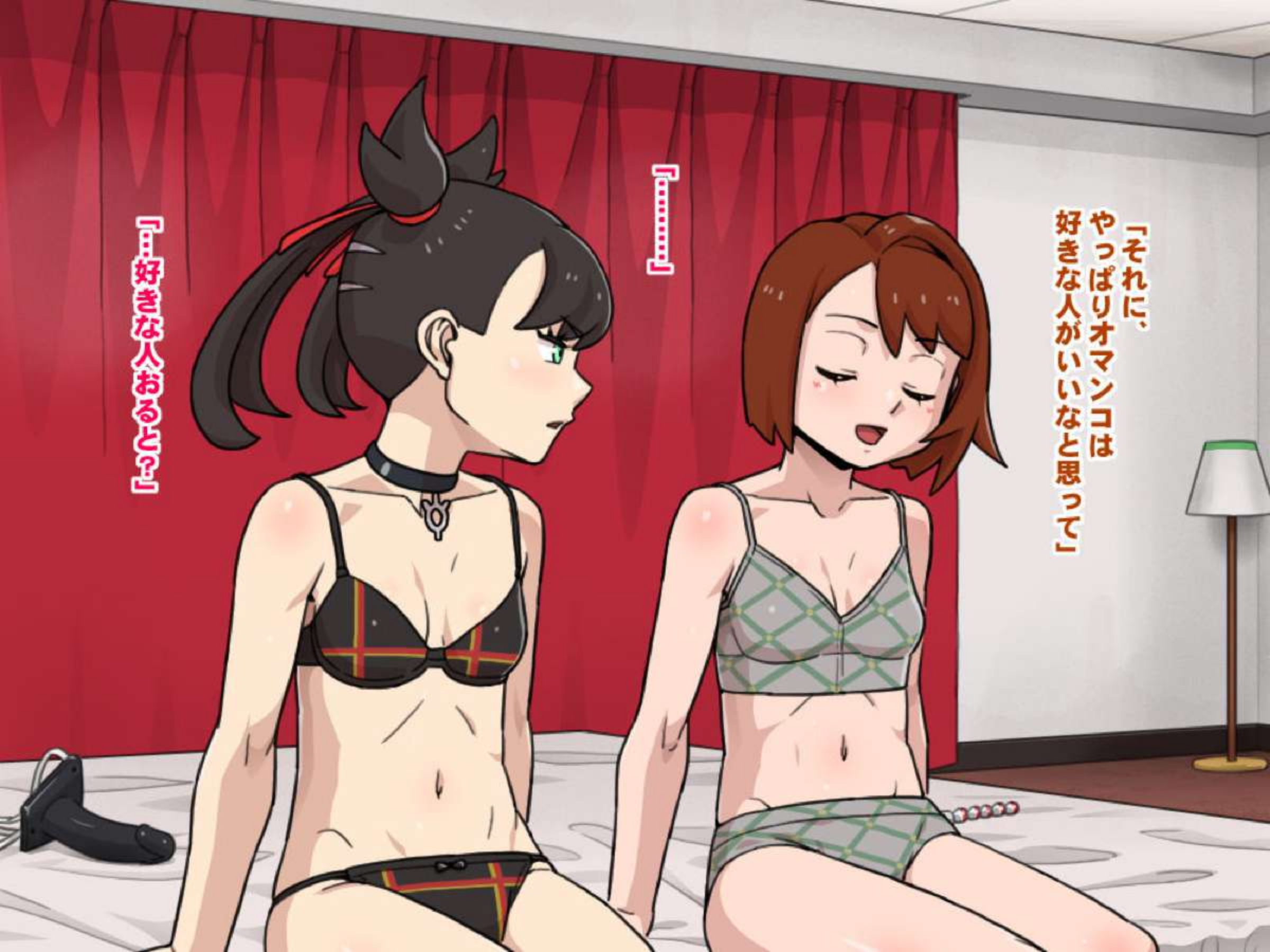




「それに、  
やっぱりオマンコは  
好きな人がいいなと思って」

「……」

「……好きな人おると？」





「いないけどね♪」

「何よそれ〜」

「くくく」

「でもあたしも同じ！  
オマンコはやっぱり  
好きな人がよかもんね♪」

「うんうん」





「ジーンと見つめてごらん、  
それは何かな？」

「チン…ポ…」

「ソニアちゃんはチンポを  
どう思ってるのかな？」

「チンポ…大好き…」

「そうだよね、好きだよね、  
じゃあどうしたいのかな？」

「しゃぶる…しゃぶりたい…  
チンポしゃぶりたい」





「それじゃあ俺が今から  
手を叩いたらチンポの  
ことしか考えられなく  
なるからね、いくよ……」

「はーん」

「……」





「ユウリちゃん  
いつの間にお尻も  
使えるようになったの?」

「へへへ、秘密♪  
それより早く  
ダブルバトル始めよう!」

イブイブイ...

「オツケ、  
それじゃ俺のチンコも  
しっかりしゃぶってね  
ユウリちゃん」





「お尻凄く絞めつけてだよ  
ユウリちゃん、  
これは直ぐにでも……!」

「ん……んっ、  
んう……っ!」

「相変わらず  
おしゃぶり上手だね、  
もう……出そうだ……!」

「んっ……じゅる、  
じゅる……!」







「んうー！」

んうー

んうー

んうー

んうー



「ふー誰の子?」

イヤッ

イヤッ

「もしかして  
尻使いの  
マリイちゃん!」

「ぶはあ...♥」

マリイ師匠のもと見事  
アナルセックスを習得!





「あ、どうもどおり  
しゃぶってユウリちゃん」

ふん

「あむ…ん…っ」

ふん

「お尻もぞもぞさせて  
どうしたの？  
お尻にも欲しいとか？  
でも今日は俺しか…」





「はは、凄いオナラ!」

「んっ!」

↑↑↑





「チンポ熱か…ペロ」

「初フェラなのにすっかり  
虜だねマリイちゃん」

し  
ろ  
ろ

「それじゃそろそろ  
しゃぶつてもらおうかな」

「お尻も動くよマリイちゃん」









「んう……！」

んう……

んう……



「ナイスフレア！」

「ぶはあ…、  
ユウリのおかげやね♪」

着々と経験値を積み重ね、  
二人はいよいよセミファイナル  
トーナメントにエントリーする！！

うわー！！



「はは、凄いオナラ♪  
もう出そうなんだねマリィ」

「ん…(コクコク)..  
うんち…出そう…っ」

「それじゃ、チンポ  
しゃぶろうかマリィちゃん」





セミアイナルトーナメントの対戦表を見に来た二人が目にしたものは…。

「あ…」  
「あ…」

ユウリ

マリィ

ビート





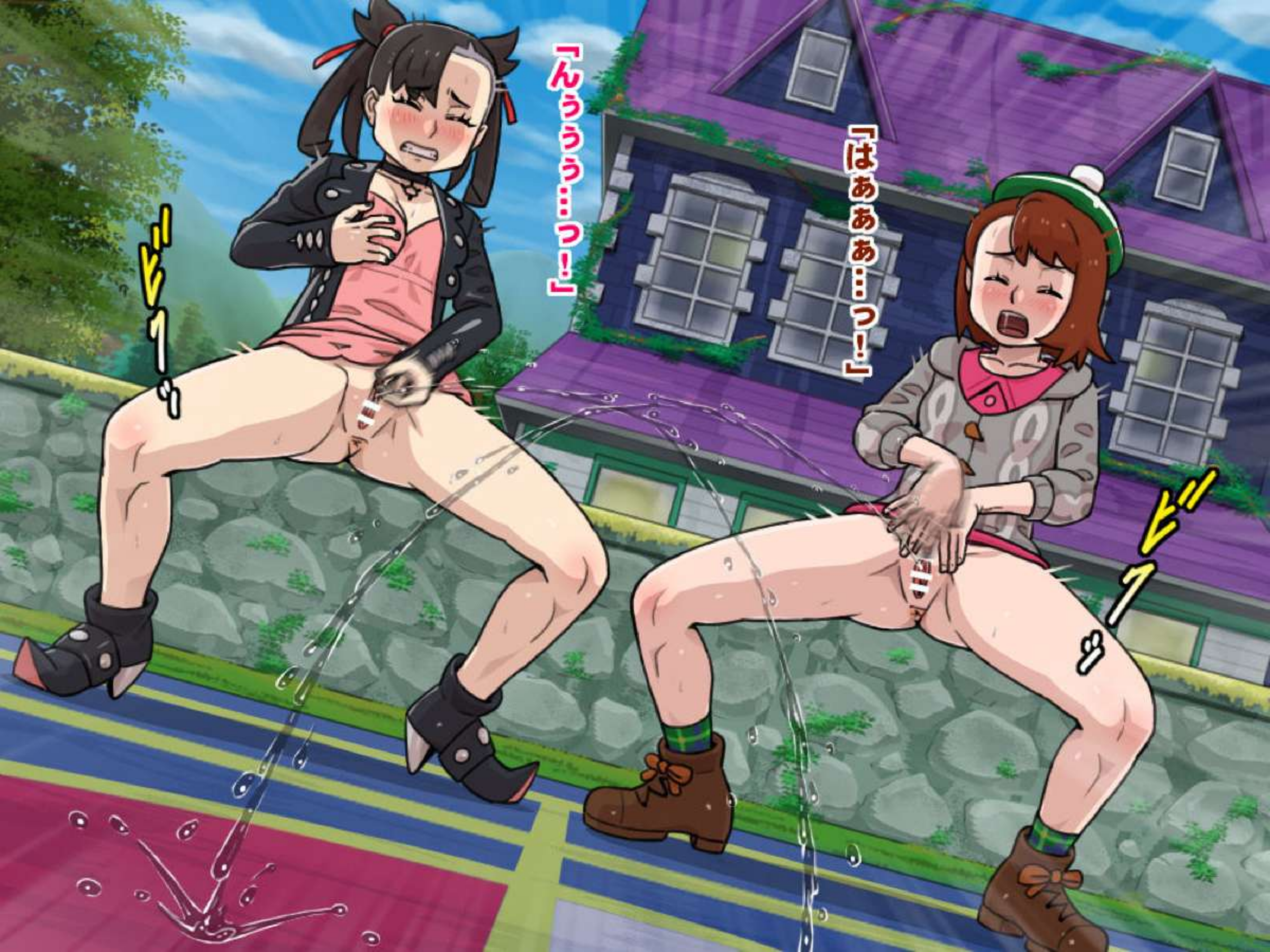
「こればかりは仕方なかね……！」

「三人で一緒に勝ち上がりたかったけど……」

二人は正々堂々全力で戦うことを誓う！！







「んううう...っ!」

「はあああ...っ!」



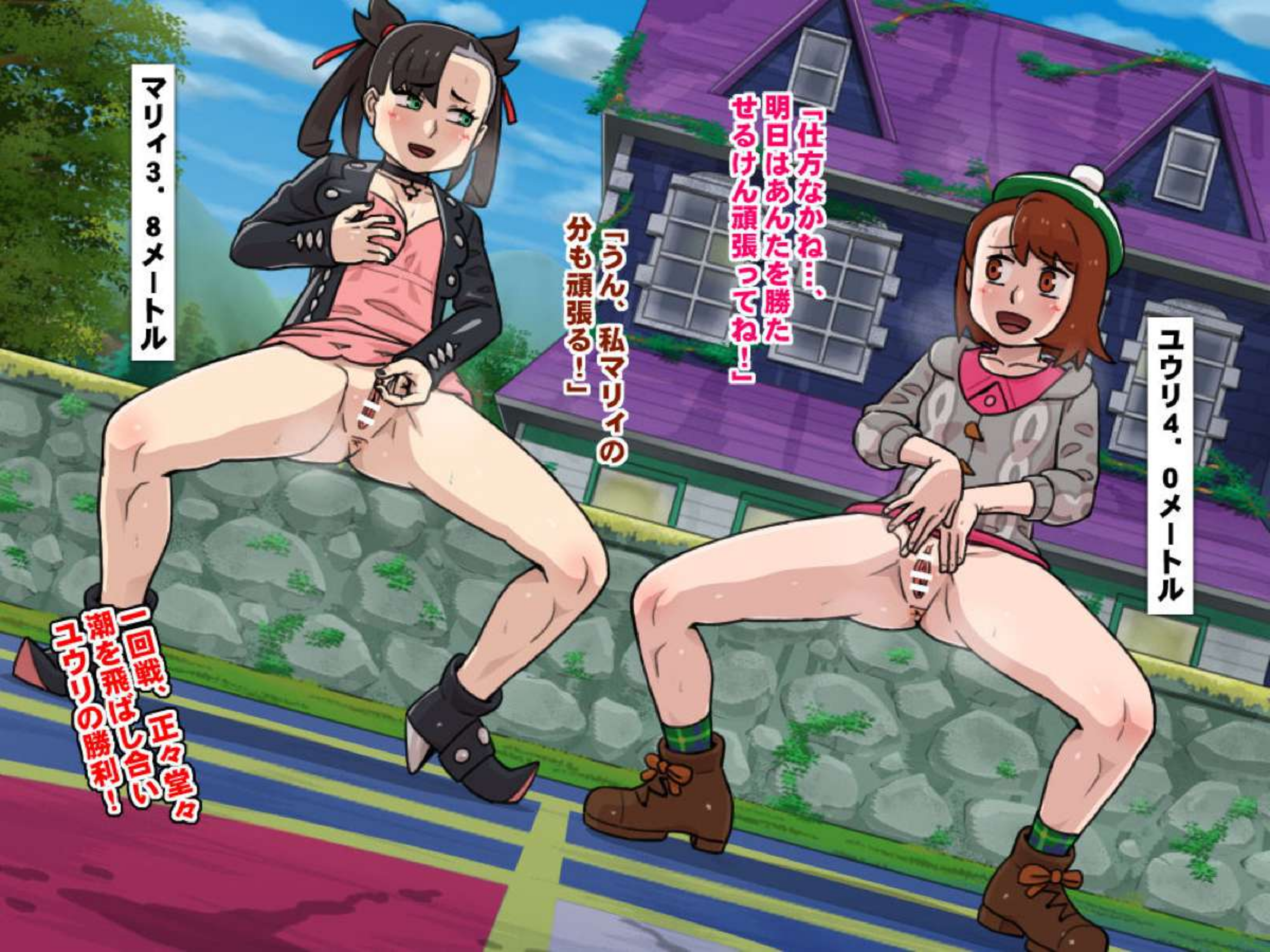
マリイ3. 8メートル

「仕方なかね…、  
明日はあんたを勝た  
せるけん頑張つてね！」

「うん、私マリイの  
分も頑張る！」

ユウリ4. 0メートル

一回戦、正々堂々  
潮を飛ばし合い  
ユウリの勝利！







「準備は良かね？」

「うん、いっぱい食べてきたから大丈夫……！」

「それじゃ、せいのっ」



「はは、  
ユウリってば  
オナラ臭か」

「マリイだって…  
いっぱい出てるよー！」

「ん…そろそろ  
うんち出そう…！」

「アタシも…  
うんちするったい…！」





「こんなことで僕を  
買収しようなんて、  
考えが甘すぎますよ……」

あむっ





「のほおおお……!」



2回戦VSジュニア! 盛衰!





「今日こそリベンジ  
させてもらいますよっ」

「やれるもんなら  
やってみんひやいっ」

パ  
ッ







「頼みましたよ  
プリムオン」

「ふえ…?」





「さあ、バトル  
開始だよホッップ」

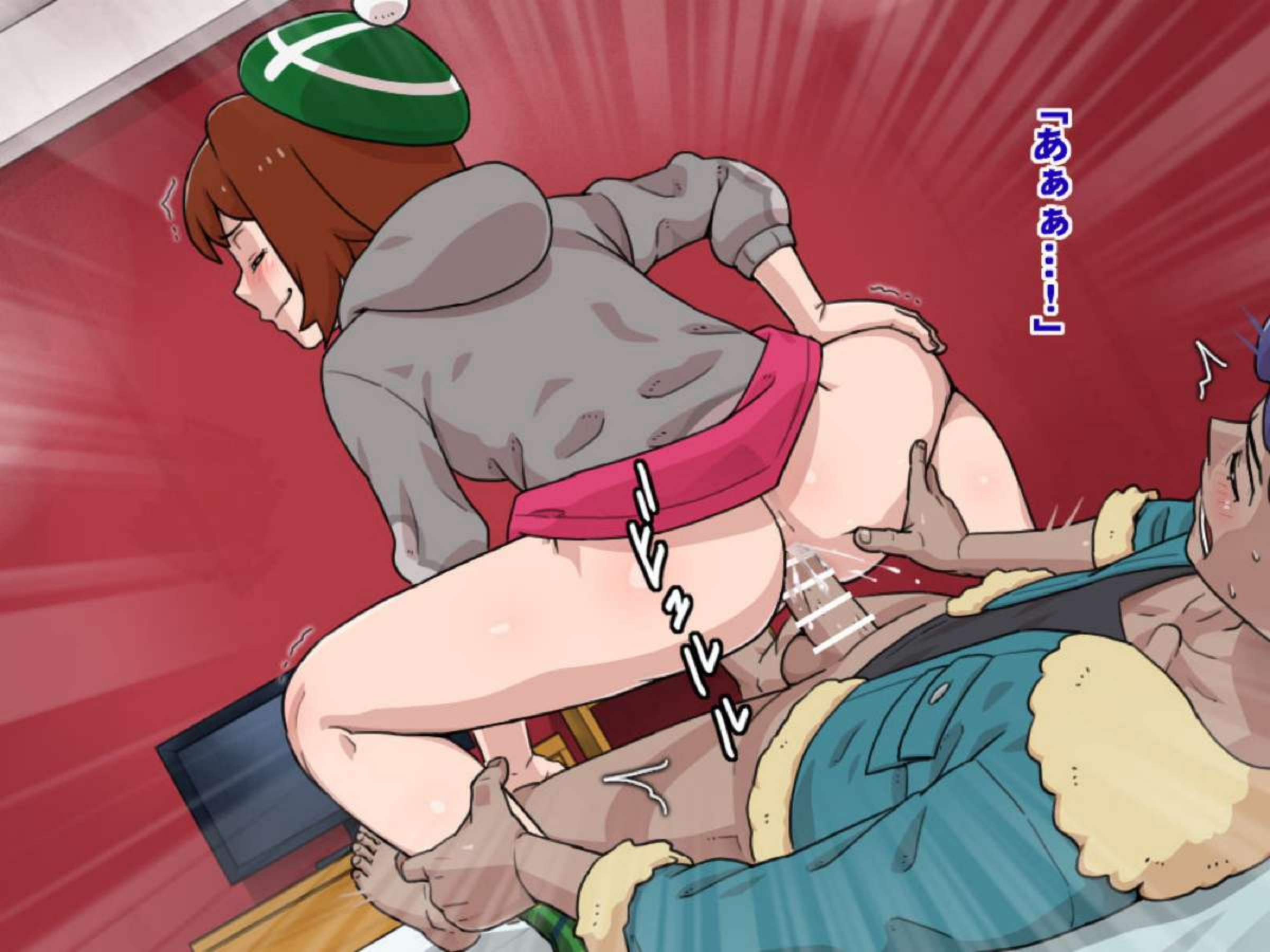
「俺はちゃんと  
ポケモンバトルで……!」

セミファイナルトーナメント決勝、vsホッップ。









「.....」



「射精したってことは  
気持ち良かったって  
ことだよな？  
ということとは  
明日の決勝は〜」

「クソ…俺も男だ、  
持ってけどろぼう！」

セミファイナルトーナメント決勝、  
ホップを買収し優勝決定!!





「正気ですか!?  
人前で排泄なんて!」

「そんなこと言っ  
ちゃっかり来とーくせ!」

「ホントは  
興味あるんだろ」

「な、ないですよ  
うんこになんか!」





「しえからしか!  
男なら目見開いて  
見ときんしゃい」

「あ...  
もう出そうっ」

「ちゃんと見てるから  
出していいぞユウリー」





「んっ…コメンっ」

「オ、オナラ  
じゃないですか！  
しかも激臭っ！」

「気にせんでユウリ、  
オナラも全部  
出しんしゃい」

「お、肛門  
広がってきた！  
そろそろ  
来るんじゃないか！」





「次はファイナル  
トーナメントだね」

「ジムリーダーたちも  
本気で来るけん、  
しつかりレベルアップ  
しとかなね！」

ポ  
ル  
ン

プ  
リ  
ン







「あっあっ、  
ああ……っ！」

ゾゾ

ゾゾ

ゾゾ







「これでファイナル  
ルーティンメントも  
バッチリだねマリィ♪」

「うん、みーんな  
アタシらのアナルとロで  
買取したるけんね♪」





「二人共お尻が好きすぎて  
チンコだけじゃ満足  
出来ないだろう？」

「だから、特別に  
コレ...を入れてあげよう」

「<...>」

「...よ...」





「何があっても  
二人で協力して  
ガラルん天下取る、  
いいねユウリ？」

「うん、約束」

「じゃあ誓いの  
アレにするよ」





「はは、ユウリってば  
いつもオナラ」

「マ、マリイだって」

「今度こそ…誓いの  
アレ、いくよ…っ」

「うんっ」

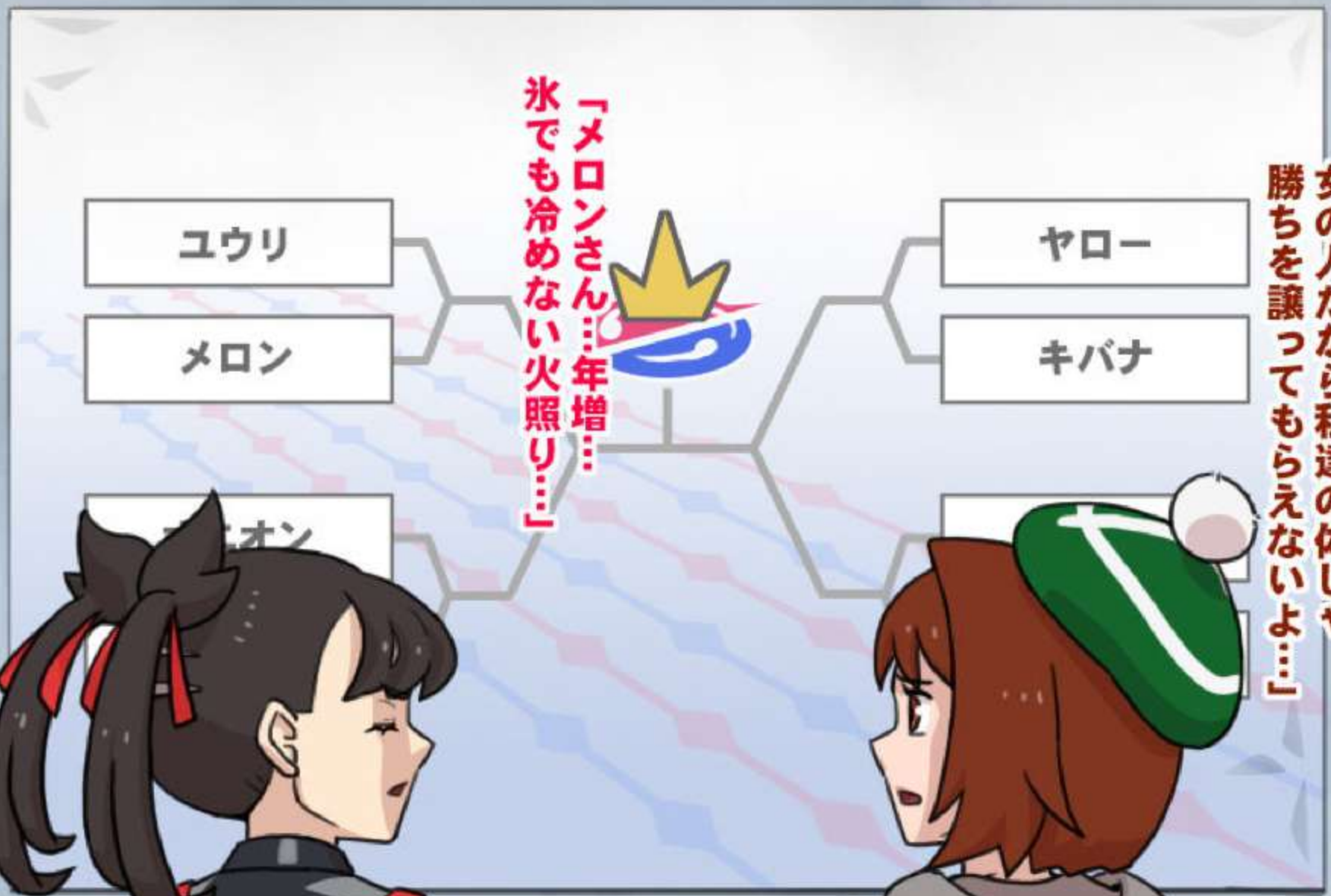
ブ  
ン  
ン

ブ  
ン  
ン





「どうしようマリィ…、  
女の人だから私達の体じゃ  
勝ちを譲ってもらえないよ…」



「メロンさん…年増…  
氷でも冷めない火照り…」

「ユウリ、あたしに  
考えがあるったい」







「ちょっと協力してほしいか…」

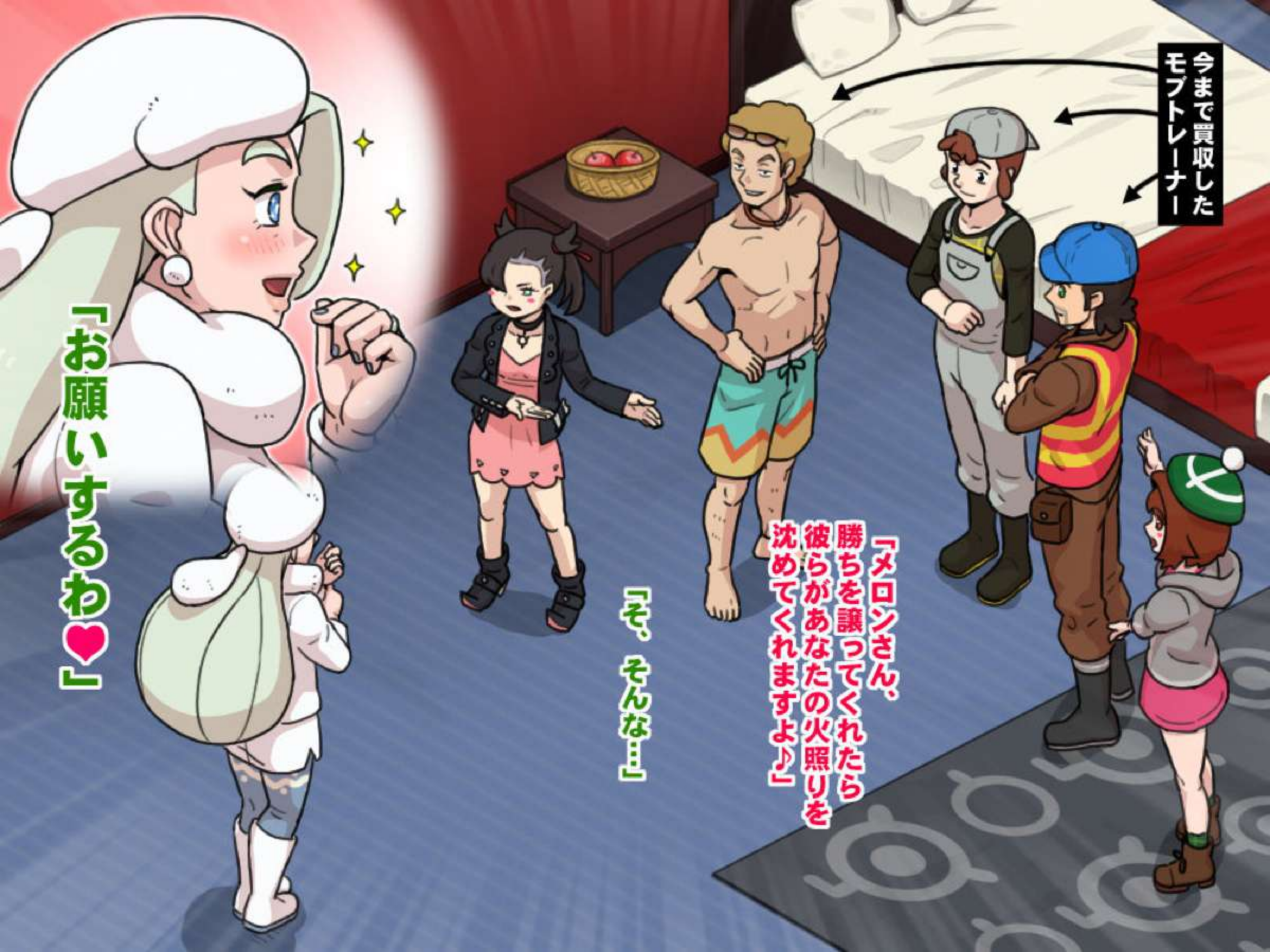


今まで買取した  
モブトレーナー

「メロンさん、  
勝ちを譲ってくれたら  
彼らがあなたの火照りを  
沈めてくれますよ♪」

「ぞ、そんな…」

「お願いするわ♥」





「ああんっ、  
もつと  
しとくれえ」

マリイの機転により  
一回戦突破!





3人ともへバツた後、休憩を挟んで再開。

「準備はいいか？」

「ああ、ばっちり  
クリティカットと  
プラスパワーを  
使ってきた」

「何だいコンコンと？」

「いえいえ、  
メロンさんは  
気にせずセックスに  
集中して下さい」

「それじゃ再開しますよ……」





「...」」

1

2



「はは、オニオン君ってば  
こつちも仮面被ってる」

「うっ…恥ずかしいです…」

「大丈夫、勝ちを譲って  
もらうかわりにアタシたちが  
立派な男にしたるけんね」





「見て、大きくなって  
顔が出てきたよ」

「き、気持ち良いです…っ」

「出していいんよ、  
ココに溜まってるもん  
全部出しんしゃい」

「ん…ま…ん」





「精液シャワーったい♪」



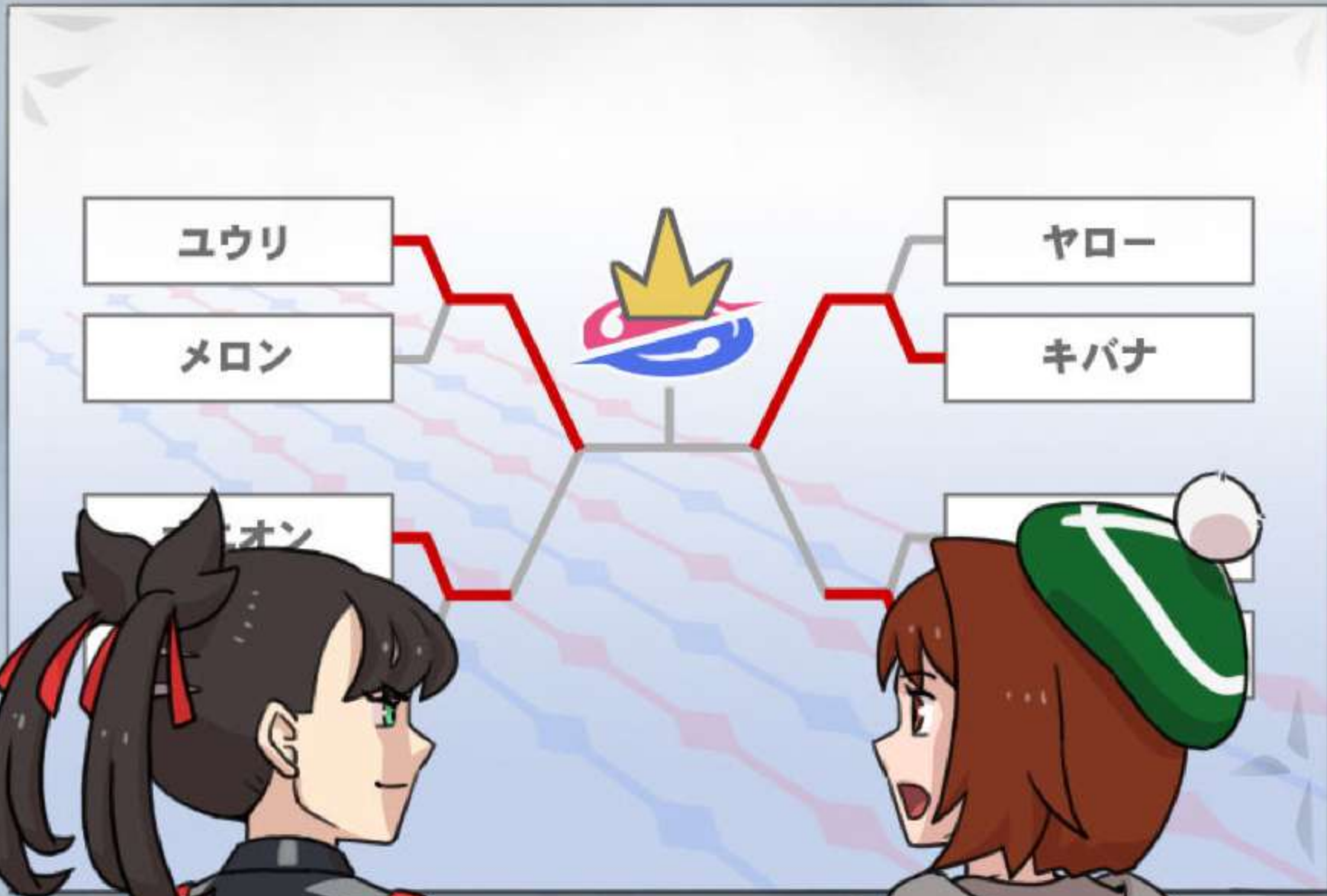
「癒さーるんねえさー」

「んんん……」

↓↓↓↓  
↓↓↓↓  
↓↓↓↓  
↓↓↓↓



「うん！」



「決勝はキバナさん、  
男の人だし次もいけるね！」





「急に呼び出して  
どうしたのオニオン君」

「そんなにアタシたちに  
してほしかった？」

「それもあるんですけど…  
今日はお二人にも…  
気持ちよくなつて  
もらおうと思つて…」





「ゲンガー、ユウリさんに  
ゴーストタイプ！」

「ヨノワールはマリィさんに  
シャドーパンチ！」





「では、次は僕の番ということ  
ことでもお願いしま…って  
どうしましたお二人とも…？」

「O……」

「O……」

おっ

っ  
ル





「アハハハ」

「アハハハ」

「お、オナラ!?  
まさかお三人とも…  
アレが出ちゃうんじゃ…」

ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ





キバナも買収しファイナルトーナメント優勝！

「キバナさん頼もー！」

「はー？」

「アタシらと夜の  
バトルったい！」

そう思った二人だったが、初めて壁にぶち当たることに…。





「あゝ駄目だね、  
二人でっつていうから  
期待したけどこの程度の  
テクじゃ勝ちには譲れないよ」

「え……」

「それにオレ  
女の子に困ってないし」





健闘むなしく決勝戦敗退……!

ガーン

ガーン

「Team中の俺、ペンギンちゃん」





「アナルでっけ言うから  
面白いと思っただけど  
こんなもんか!」

「ん……」

「ん……」

「このまま帰すのも  
可哀想だし、ちよつくら  
オレが指導してやるよ」





「キバナさんを満足させる  
なんて何年かかるか……」

「体だけでチャンピオンに  
なるのは無理なのかな……」

「諦めるんは早か。  
こうなったらあの人に  
お願いするしか……!」

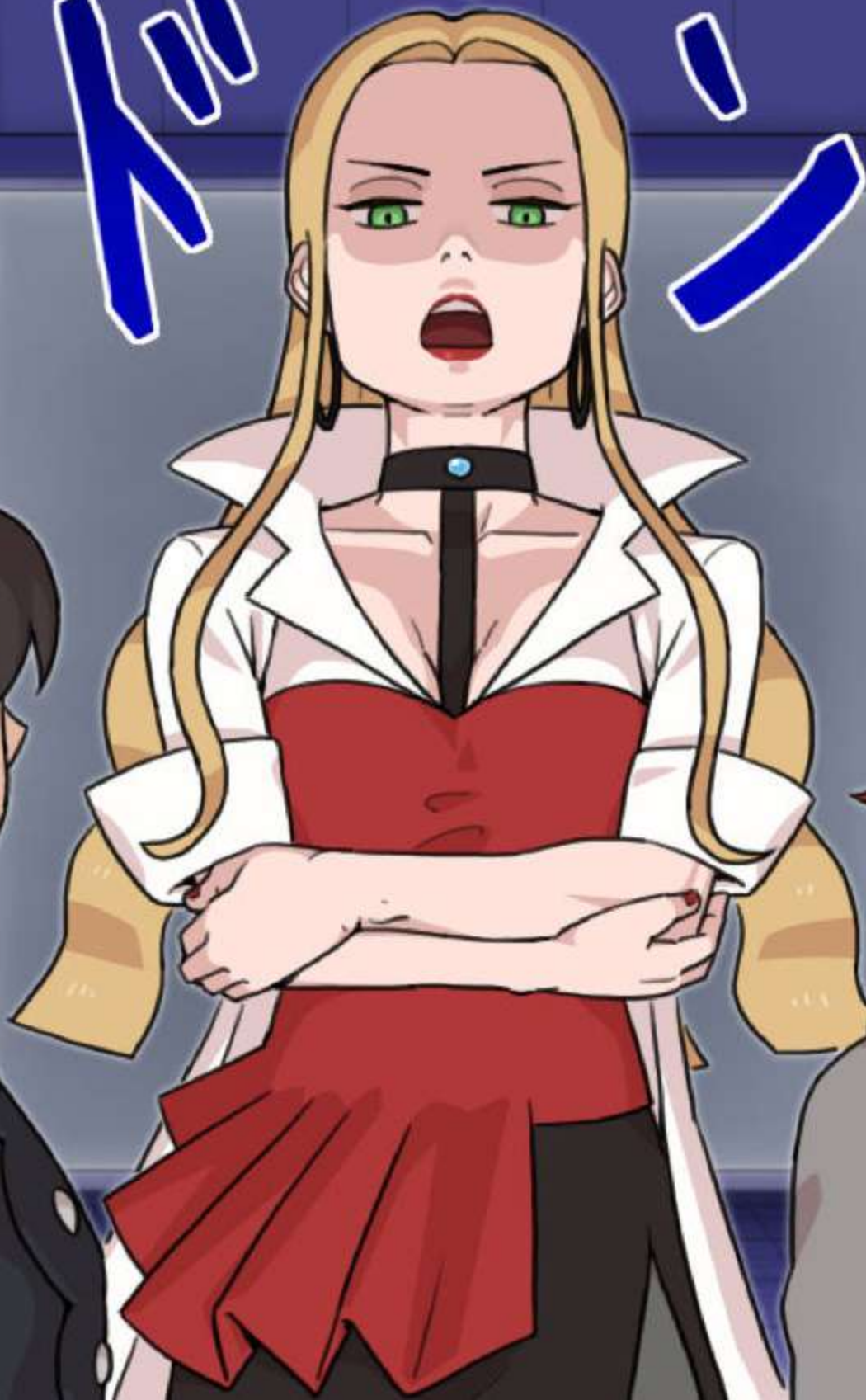




「委員長にお話？」

「ド」

「わたくしを納得  
させてからにして  
もらおうかしら」



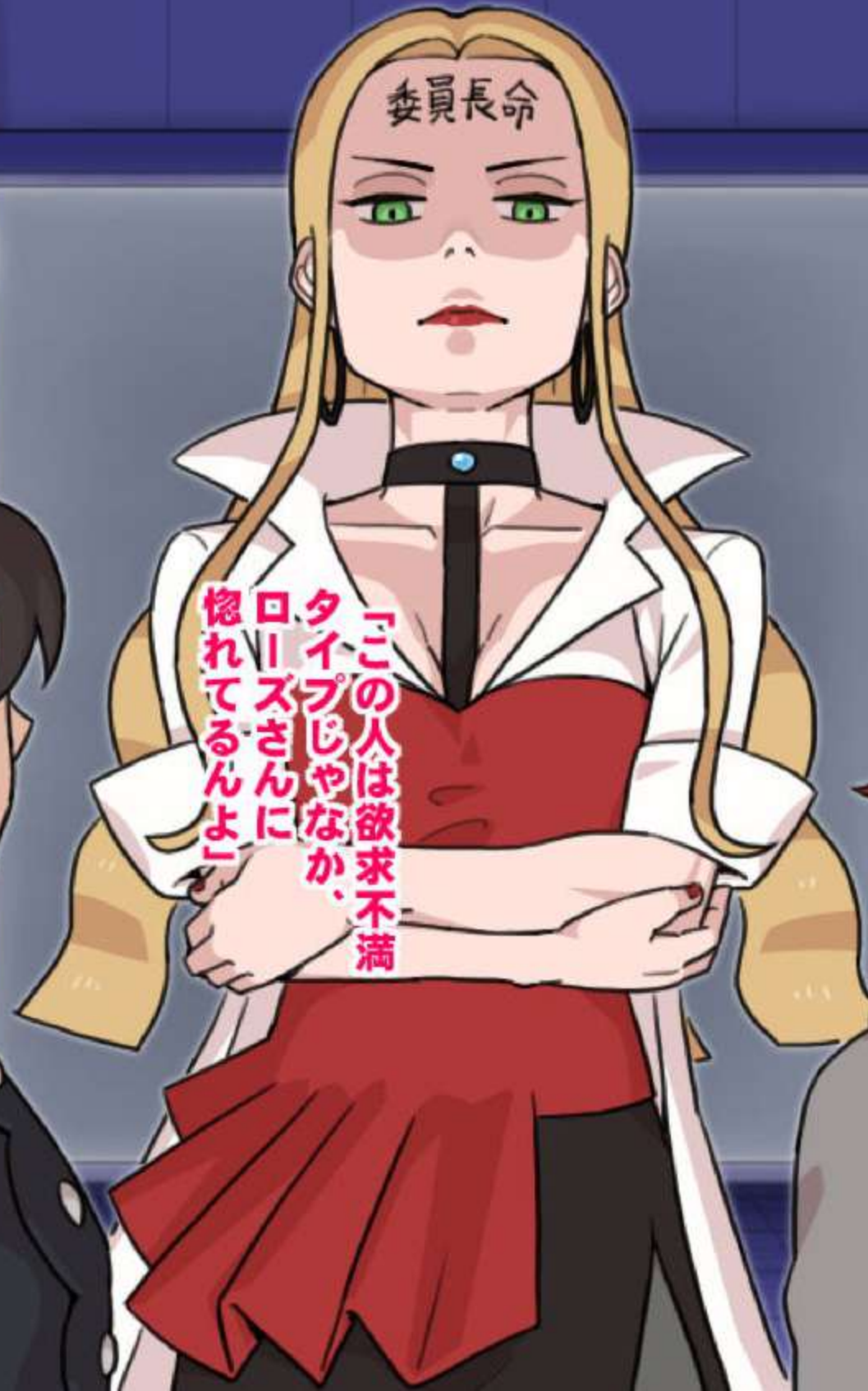


「ここはメロンさんと  
同じ方法で！」

委員長命

「この人は欲求不満  
タイプじゃなか  
ローズさんに  
惚れてるんよ」

「やけんあたしたちで  
何とかせんと！」





ユウリの  
マリイの舌技と  
オリイの  
オリーヴ  
突破!  
開発で

「こんなテクを  
持ってるなんて……」

「なんて娘たちなの……」





「降参するオリーヴさん？」

「ま、まだまだ…  
わたくしは…！」

「ふふ、  
そうこなくつちや〜」





「な、何を……!？」

「意地っ張りな  
オリィヴさんには  
特別メニューったい」





「ち、違っ……!」

「ユウリ、オリーヴさんが  
素直になれるように吸ったげて」

「ははくん、お尻が  
緩んで出そうなんやね?」

「はい!」





「オナラだけじゃ  
なかでしょ？  
見せてあげるから  
出しんしゃい」

「……」

チユクウウウ

ゴゴゴ





「ドーナメントの  
ことで私に相談？」

「はい、もちろん  
タダでとは言いません」

「あたしたちの口と  
お尻を好きにしてよかつ」

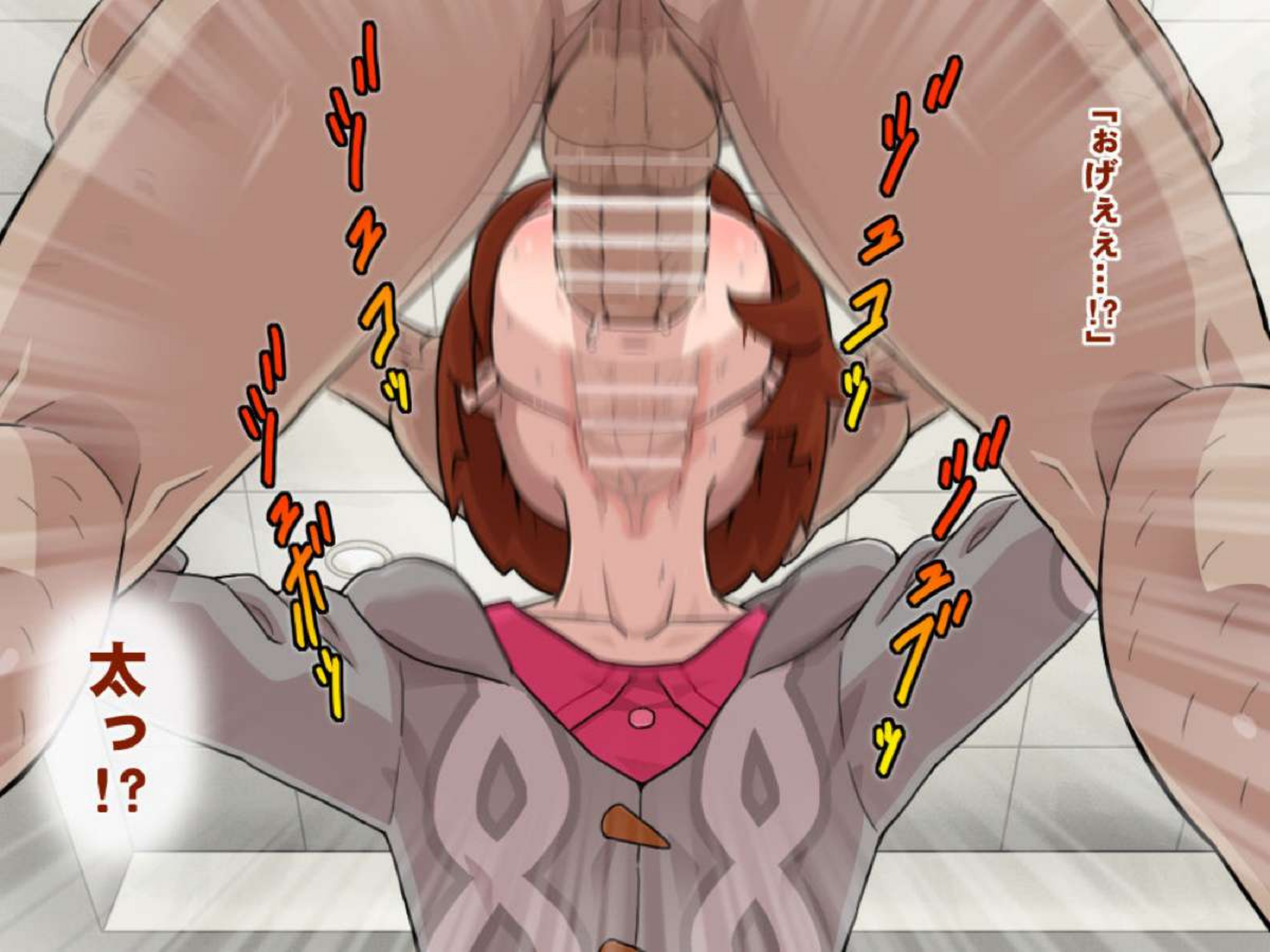
「ほほう」





「おげええ…!?!」

太っ!?!





「おほおお……!?」

ユウリ&マリイ、  
ダイオウドウ級ペニスで瞬殺!

太っ!?









「ペニスの先が君の子宮に  
当たっているのが分かるかい？」

「ま…まさか…!!？」

イグイグ

「ふふ、気付いたかい？」











ツツツ

ツツツツツ

ツツ

ツツ



「ローズさんの  
ダイオウドウ…凄いな…」

「うっ、強すぎるったい…」



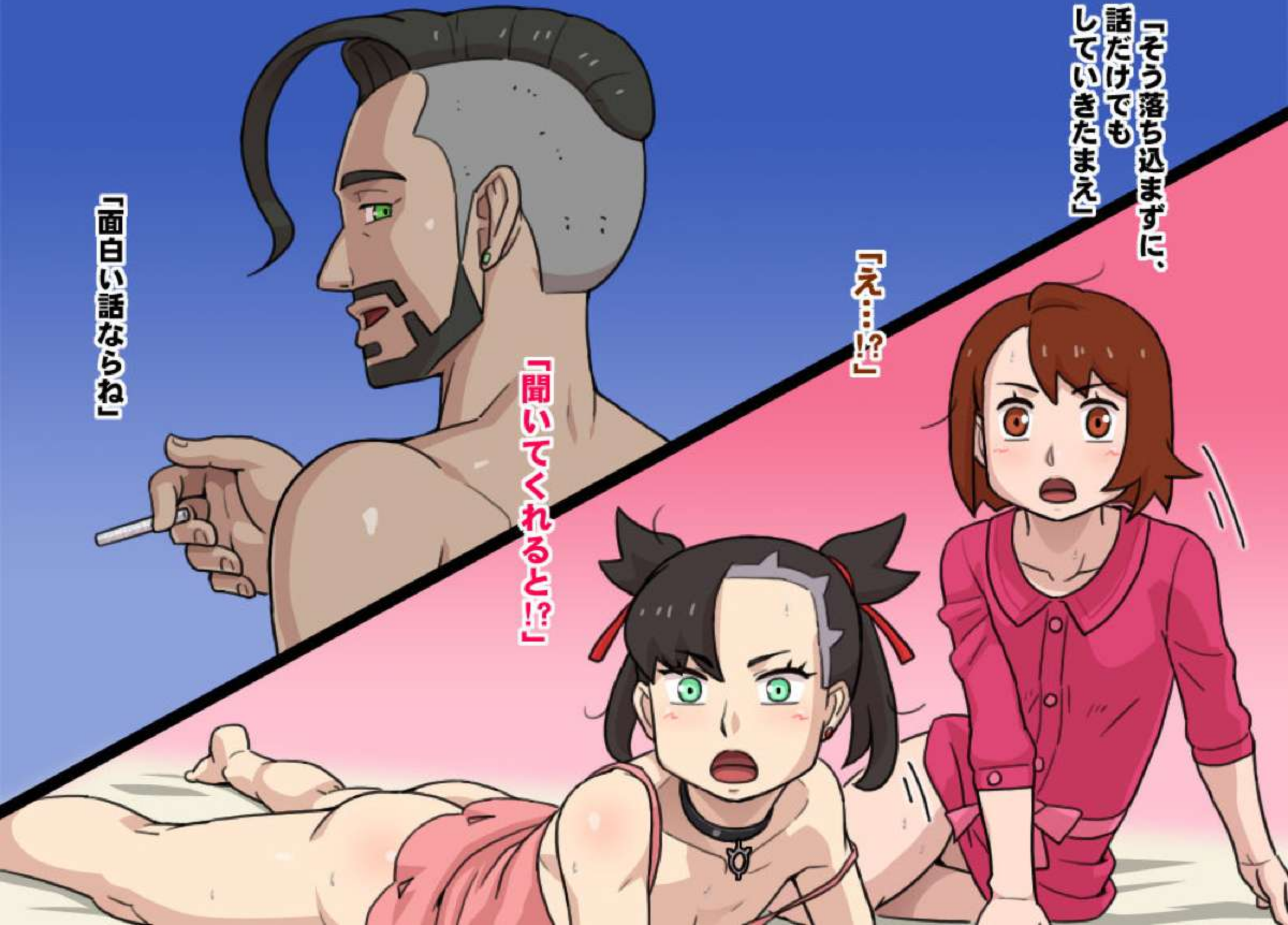


「そう落ち込まずに、  
話だけでも  
していきたまえ」

「え…!?!」

「聞いてくれるよ?!」

「面白い話ならね」





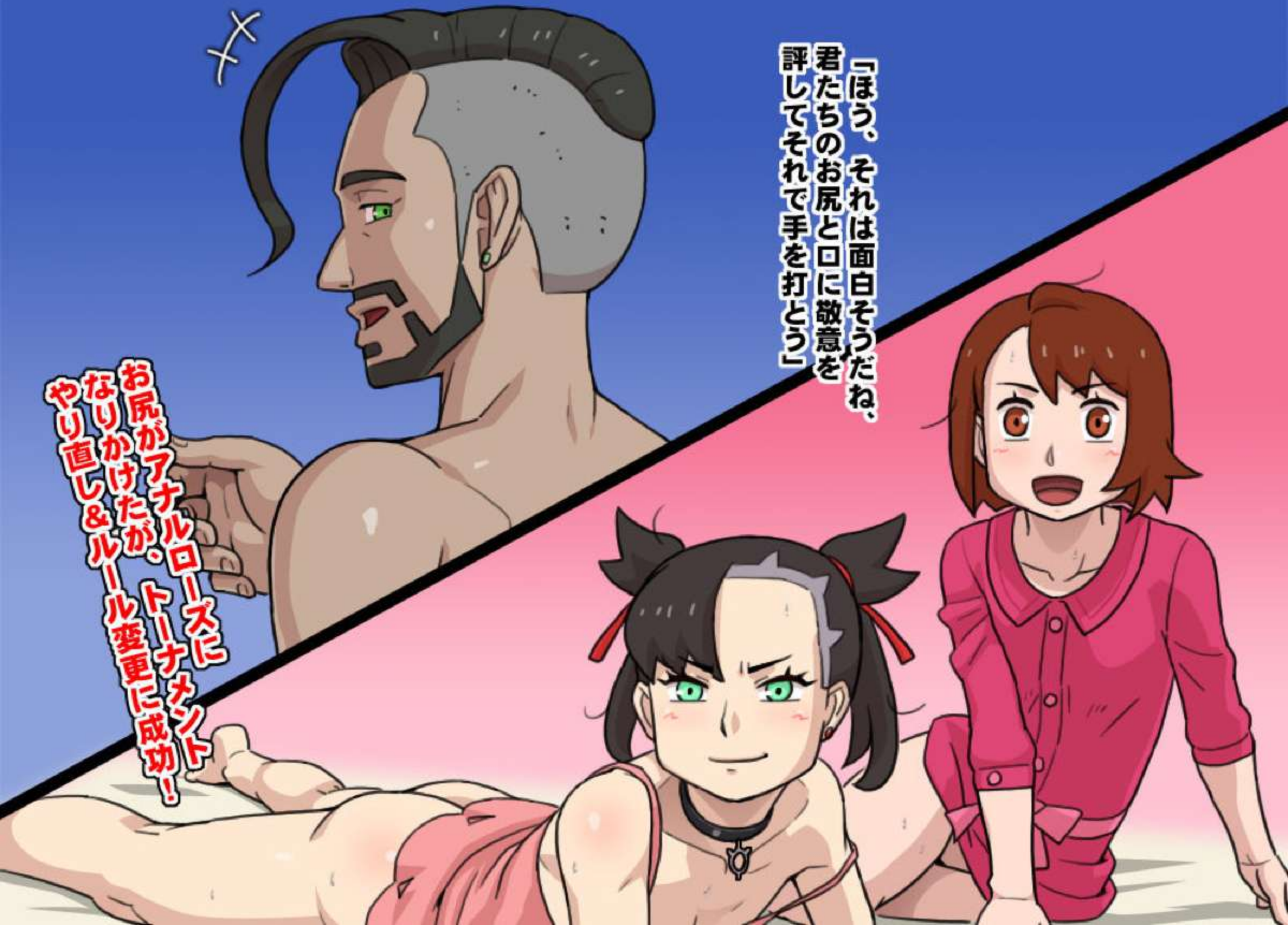
「ふむ…  
いきなりキバナを出場停止と  
言われてもさすがにね…」

「ならせめて  
トーナメントを  
ダブルバトル方式に……！」

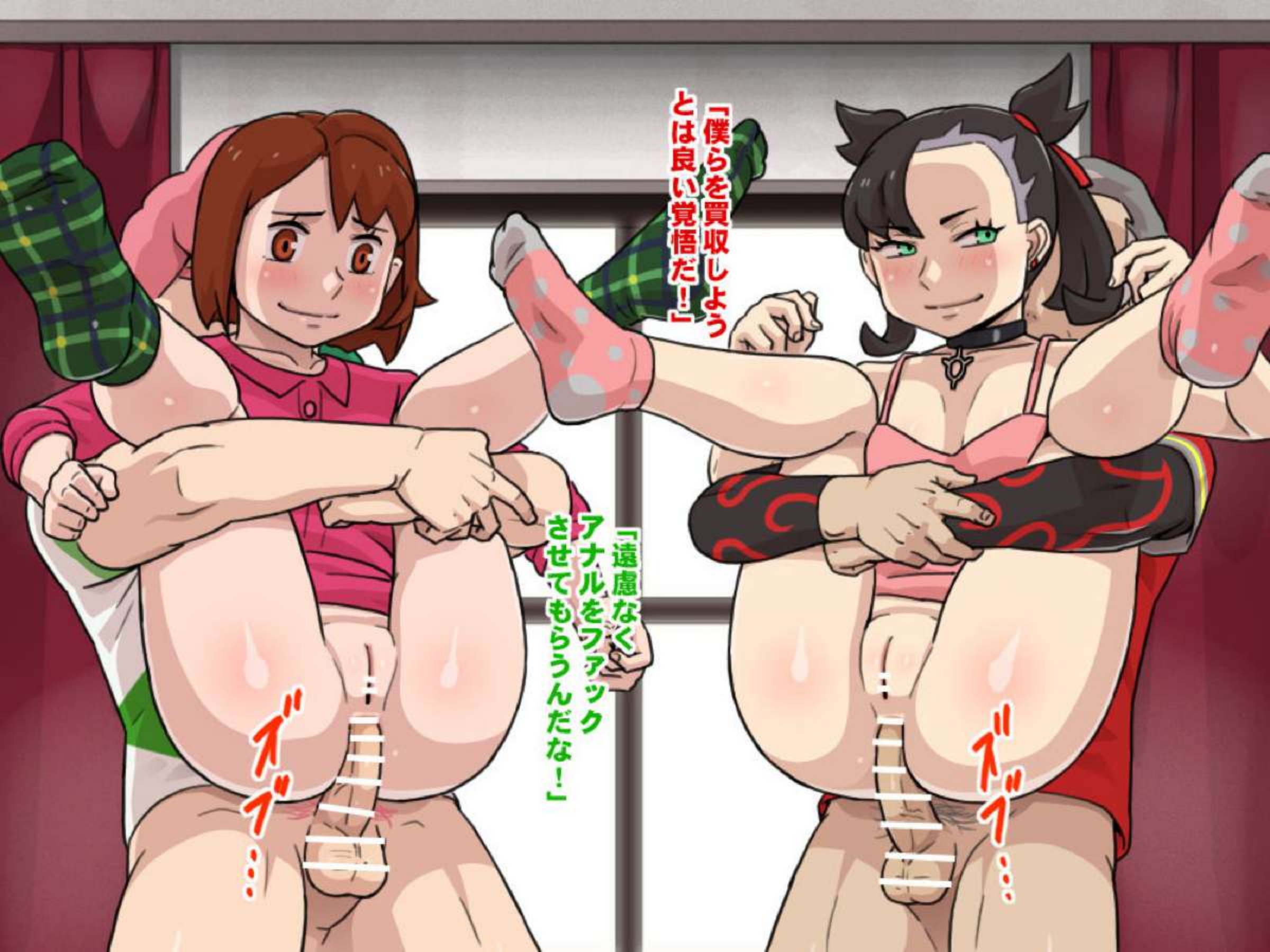


「ほう、それは面白そうだね、  
君たちのお尻と口に敬意を  
評してそれで手を打とう」

お尻がアナルローズに  
なりかけたが、トーナメント  
やり直し&ルール変更成功！







「僕らを買収しよう  
とは良い覚悟だ！」

「遠慮なく  
アナルをフアック  
させてもらうんだな！」

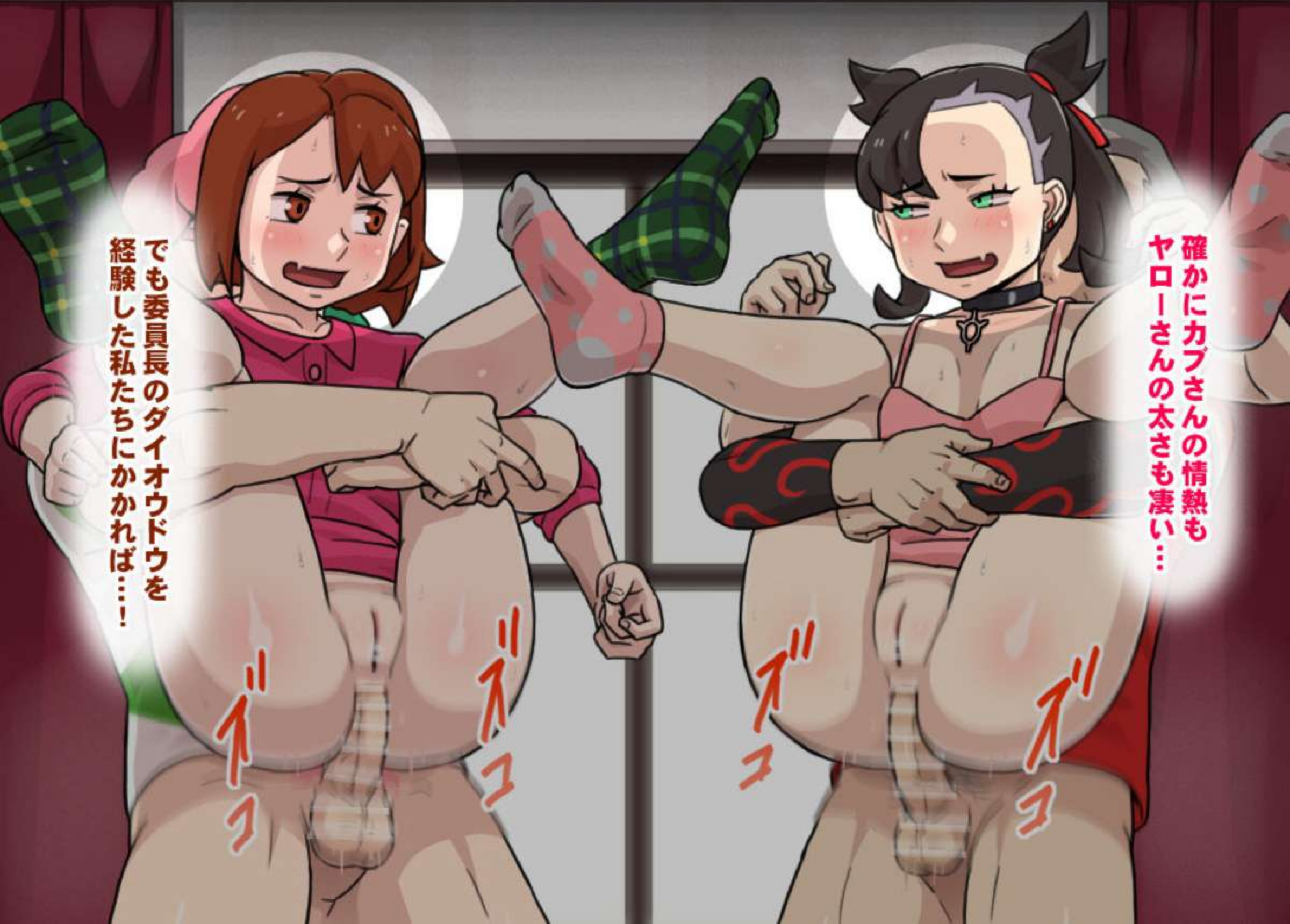
グ  
グ  
グ...

グ  
グ  
グ...



確かにカブさんの情熱も  
ヤローさんの太さも凄い…

でも委員長のダイオウドウを  
経験した私たちにかければ…!!







「ぬああ...!?!」

「は...は...!?!」

キユククク

キユククク





ダブルバトルーナメント  
一回戦カフ&ヤロー撃破!

カフ

カフ



00:00:03



「おしやぶりユウリ、  
三人合わせて  
変態ユウマリです」

「どうも、  
アタシたちは  
尻使いマリイと」





「今日はカブさんと  
ヤローさんに  
抱っこしてもらって、  
二人でうんち  
したいと思いまーす」

「それじゃあ、  
早速レッツゴー」





「握っただけで  
ビクビクしとる。  
射精したいんじゃないか？」

「君たちがこんな立派な  
モノを持つてるなんてね」

「どっしりしてほしいか  
言っでござらん」

ニギージ

ガジッ





「お願いします、  
射精させて下さいー!」

「お、思いっきり  
ジコジコして欲しかー!」